

これからの幸せ

第2回 in 東京

2022年11月14日(月) 有楽町よみうりホール | 主催 浄土宗 後援 読売新聞社

第一部 講演

五木 寛之(作家)

第二部 座談

田中 優子(法政大学名誉教授、江戸研究)
井上 広法(浄土宗僧侶、宇都宮共和大学非常勤講師)
戸松 義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



向き合って語り合う先に…(五木さん)

第一部は、今年90歳になられた作家の五木寛之さんの講演。「法然上人は80歳、親鸞聖人は90歳まで生きました。これから私はどなたを目標にすればいいのか(笑)」と語りはじめます。

法然上人が浄土宗を開いた平安後期、干ばつ、疫病、内戦などで、人々の心は極限状態にありました。

海山稼ぐとせしほどに
万の仏に疎まれて
後生わが身をいかにせん(『梁塵秘抄』)
当時の流行歌「今様」に、庶民の救われない気持ちが表れています。そんな時代に法然上人が「念仏を唱えるだけですべての

人は救われる」と説くと、人々は歓喜をもって「弥陀の救いぞ頼もしき」と歌ったのです。

「3年も続いたコロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻…いま、戦後最大の危機と混迷の時代かもしれません。絶望的な現実立ちすくみ幸せから遠ざかっている私たちに、まだ法然の時代のような「歓喜の歌」は聞こえてきません」。

今日は久しぶりの「生の」講演という五木さん。「皆さんと対面して話す喜びをしみじみ感じます。こうして向き合って、悲しみや喜びを語り合う先に、幸せをつかめるのではないかと締めくくりました。

江戸時代、人々はよく笑った(田中さん)

「幸せでなくなる大きな原因は戦争ですが、戦争のない社会こそ江戸時代の目標で、実際、永きにわたって戦争のない時代でした」

第二部の座談。江戸文化が専門の田中優子さんが「江戸時代と幸せ」を語り始めます。

江戸社会は「経世済民」「勿体ない」という考えに基づく自給自足で無駄のない循環

型社会で、人々は好奇心旺盛で教育熱心。当時の寺子屋の様子を描いた絵の多くは、どの子ども達も実に幸せそうです。

また、渡部京二著『逝きし世の面影』では、幕末以降に来日した多くの外国人の手記が紹介されますが、「日本人は幸せそうで、よく喋りよく笑う」と異口同音に書かれています。



幸福度は「心がけ」で変わる(井上さん)

浄土宗僧侶で心理学を修めた井上広法さんは、PTSDならぬ「PTG(心的外傷後の成長)」という考えがあるといい、「法事とは、定期的に故人と出会い直すことで、悲しみから喜びを紡ぎ出す場」と考えます。

また、持続的な幸福感の要因の半分は遺伝子で1割は社会的要因(お金や地位、名誉)ですが、残り4割は「本人の意図的行動」即ち「心がけ」とあるという研究を紹介

し、「近年言われる『well-being(持続的な幸福)』とは、人生観、世界観など『心がけのあり方』を変えてゆくこと。それを支えるのが宗教の役割」と述べました。



これからのお寺の役割とは?

これからのお寺の役割について、皆さんが語り合います。

田中さんが「江戸時代は寺請制度で全ての集落にお寺があって、人々の生活の中に仏教が根づいていました。人の「死」を引き受けてくれて、そこに行けば心が洗われるような場所。お寺には、そういう働きをこれからも担ってほしい」と言うと、井上さんは「大切な人の「死」をも預けることで安心を得られるような「関係性」をつくるのが大事」と答え、哲夫さんが「地域の関係性も

希薄になりましたが、お寺さんがもう一度人々をつなげて、笑顔を広げてほしい」と言えば、戸松さんは「お寺の中心は、なんといっても檀家さんや地域の皆さん。もっと門戸を広げて気軽に来れる場所にしていかなければ」と述べ、井上さんは「お寺のクラウドファンディングも広がってゆくでしょう。「檀家さん」というよりお寺の「ファン」を増やしていくのです。これからは「寺」対「家」ではなく、「寺」対「個人」でやっていくことが大事」と提言しました。



ありのままの自分に微笑むことから(戸松さん)

皆さんの締めくくりの言葉を紹介します。田中さん…「幸せと宗教が繋がっている時代」があったんです。江戸時代の仏教は家族や共同体と共にありましたが、井上さんの「寺が直接個人と繋がる」というのは実に新しい発想。どう展開してゆくのか、仏教が「well-being」をどう担ってゆくのか、すごく楽しみです。

井上さん…「幸せは繋がりの中で感じるもの。コロナ発生後、宗派を超えた日常的な

オンラインネットワーク作りを試みていて、繋がりはまもなく15万人。彼らは「信者」ではなく「仲間」なのです。

戸松さん…無理をせず、人それぞれ、できることをやればいいのです。江戸時代は皆が笑顔だったといいますが、まず、ありのままの自分を受けとめ自分に微笑みかけてみる。そうすれば人に対しても微笑むことができる。そこから始めてゆくのではないのでしょうか。

